



# 自然遊学館 だより



2007 WINTER

No. 42



■2007.1.12 発行 貝塚市立自然遊学館

## ■行事レポート

- 蕎原ハイキング 箱谷川の生きものたち……1
- 化石採集 in 蕎原……………3
- たわわの小池さらえ……………4
- 源流探検……………6
- 「トンボの池」の池さらえ 2006 冬……7

## ■生きものよみもの

- カマキリタマゴカツオブシムシ  
の生活史1……………8
- 【泉州生きもの歳時記】
- 山の野ネズミ・ヒメネズミ……………10
- 館長コーナー
- 冬2. 冬の海岸から……………11

## ■投稿

- みどりいろのコカマキリが7個の  
たまごをうみました! (江本大地) ……13
- 寄贈標本の紹介……………14
- 遊学館スタッフ日誌……………16
- おしらせ……………17



## ■行事レポート

### 蕎原ハイキング

#### 箱谷川の生きものたち

場所：蕎原

日時：2006年10月14日(土) 10:30～14:30

参加者 23名

今年も秋の蕎原ハイキングを行いました。まずは蕎原バス停に集合し蕎原会館へ、そこから近木川沿いの田畑に向いました。稲刈りが終わった水田には、トノサマガエル、アマガエル、ツチガエルがたくさんいました。ヘビの大好きな奥田大介さんがヤマカガシを捕まえ、参加者に見せてくれました。水田脇の水路では、カワニナ、マシジミ、チスイビルなどが見られました。

近木川に流れ込む支流の箱谷川の沿道をゆっくり登る途中、ヤマノイモやアケビを観察し、センチコガネやヌルデミミフシ(虫こぶ)を採集しました。犬の糞を食べていたセンチコガネを採ってくれたのは高野晴一郎さんです。箱谷川にかかる小橋付近で昼食をとり、奥田さんが用意した針と糸でカワムツ釣りが始まりました(図1)。ここでは木室仁太さんがハラビロカマキリの腹から脱出して川に流れていくハリガネムシを見つけました。

昼からは野井谷池(箱谷川の上流)までハイキングです。途中で木室剛太さんがスジクワガタのオスを採集しました。野井谷池ではたも網や釣りで、ギンブナ、ツチガエル、ウシガエルといった水生動物、クロスジギンヤンマ幼虫、マツモムシ、ミズスマシ、ヒメガムシといった水生昆虫を採集

しました。トンボはオオアオイトトンボの成虫が採れましたが、行事中ずっと飛んでいたヤンマは、とうとう最後まで採れずじまいでした。



図1. カワムツ釣り

最後の説明の時にびっくりしたことは、昼食をとった場所で江本大地さんがコカマキリの緑色型のメス<sup>1)</sup>を、松浪佑志さんがヒナカマキリのメス(図2)を採集していたことです。コカマキリはふつう褐色型で、緑色型はほとんど見かけません。また、ヒナカマキリは大阪府レッドデータブックの準絶滅危惧に指定されている種で、自然遊学館に成虫の標本がありませんでした。自分もずっと探していたのに、子どもたちの目の方が虫を見つけるという点で優れているということでしょう。貝塚の子どもたちはなかなかやりますね。

1) 本号で江本大地君に、緑色コカマキリの飼育結果を報告してもらいました。



図2. ヒナカマキリ♀成虫 (体長 16mm)

<確認した昆虫>

オオアオイトトンボ、クロスジギンヤンマ幼虫、ウスイロササキリ、ササキリ、ウマオイ属の一種、エンマコオロギ、ツツレサセコオロギ、ハラオカメコオロギ、クサヒバリ、カネタタキ、オンブバッタ、コバネイナゴ、オオカマキリ、ハラビロカマキリ、コカマキリ、ヒナカマキリ、ヤマトシロアリ、ツماغロオオヨコバイ、オオヨコバイ、ヌルデシロアブラムシ (虫こぶ)、マツモムシ、クモヘリカメムシ、クロナガオサムシ属の一種、ミズスマシ、ヒメガムシ、センチコガネ、スジクワガタ、モンシロチョウ、キチョウ、スジグロシロチョウ、キタテハ、アサギマダラ、ウラギンシジミ、キボシアシナガバチ (巢)

<動物>

カワムツ、ギンブナ、カワニナ、マシジミ、チスイビル、ツチガエル、ウシガエル、イモリ

<植物> \*印は帰化植物

<きく科>ヨメナ、ヨモギ、\*セイタカアワダチソウ、\*アメリカセンダングサ、アキノノゲシ、ノゲシ、タカサブrow、センダングサ、\*ヒメムカシヨモギ、\*オオアレチノギク、\*ハキダメギク、アザ

ミ sp.、ヒヨドリバナ、シュウブソウ、ヤブタバコ、ガンクビソウ、\*ダンドボロギク<うり科>カラスウリ<おおばこ科>オオバコ<きつねのまご科>キツネノマゴ<ごまのはぐさ科>トキワハゼ<しそ科>ヒメジソ、アキノタムラソウ<くまつづら科>アレチハナガサ、クサギ<かきのき科>カキノキ<つつじ科>モチツツジ<きょうちくとう科>テイカカヅラ<あかばな科>チョウジタデ、\*コマツヨイグサ<みそはぎ科>\*ホソバヒメミソハギ<つばき科>チャ、ヒサカキ<ぶどう科>ヤブガラシ<うるし科>ヌルデ、ヤマウルシ<かたばみ科>カタバミ<ふうろそう科>ゲンノショウコ<まめ科>コマツナギ、クズ、\*アレチヌスビトハギ、ヌスビトハギ<ばら科>クサイチゴ、フユイチゴ、キンミズヒキ<ゆきのした科>ウツギ、ノリウツギ<あぶらな科>\*クレソン、イヌガラシ、<あけび科>アケビ、ミツバアケビ<きんぼうげ科>センニンソウ<しきみ科>シキミ<ひゆ科>ヒナタイノコヅチ、\*ホナガイヌビユ<たで科>イヌタデ、ハナタデ、サクラタデ、ミズヒキ、ミゾソバ<いらくさ科>カラムシ<くわ科>クワクサ、ヒメコウゾ<ぶな科>アラカシ、ウバメガシ、コナラ<どくだみ科>ドクダミ<しょうが科>ミョウガ<あやめ科>シャガ<やまのいも科>ヤマノイモ<ひがんばん科>ヒガンバナ<ゆり科>ジャノヒゲ、サルトリイバラ、ギボウシ<つゆくさ科>ツユクサ<さといも科>ムロウマムシグサ<かやつりぐさ科>コゴメガヤツリ、ナキリスゲ、ヒメクグ<いね科>メヒシバ、オヒシバ、ギョウギシバ、イヌビエ、チカラシバ、\*オオクサキビ、\*シマスズメノヒエ、キンエノコロ、アキノエノコログサ、\*コスズメガヤ、アゼガヤ、チヂミザサ、カゼクサ、ネズミガヤ、コブナグサ、ノガリヤス、ヌカキビ、ススキ、\*キシユウスズメノヒエ<ひるむしろ科>フトヒルムシロ<みくり科>ナガエミクリ<おしだ科>ベニシ

ダ、ホシダ<わらび科>オオバノイノモトソウ、ワラビ、ホラシノブ<うらじろ科>コシダ、ウラジロ<とくさ科>スギナ

(岩崎 拓・山田 浩二・湯浅 幸子)

## 化石採集 in 蕎原

場所：蕎原箱谷

日時：2006年10月22日(日)10:30~15:00

参加者 42名

昨年はスケジュールに組み込まなかった化石採集ですが、例年、人気の観察会だけに、募集するや、あつという間に定員に達してしまい、それ以降の申し込みに相次いでお断りするのが心苦しい限りでした。採集地の蕎原箱谷は、化石採集のできる場所として知られ、いろいろな団体が採集会を行っていることもあり、年々、<sup>みとう</sup>露頭(崖)が後退していっています。また、露頭を直接ハンマーでたたくと落石の危険があるため、今回の採集会に先立ち、蕎原箱谷古生物研究会の加藤守さんらが、あらかじめ露頭を崩しておいて下さいました。

当日は初めに講師の高田雅彦さんより、和泉層群の地層で産出する化石の話や、採集についてのアドバイスを伺いました。そして、参加者は目を守るためのゴーグルをかけ、ハンマーとタガネを手に準備オーライ！高鳴る期待を胸に、砕かれた岩石の積もった小山を登って行き、採集を始めました。



蕎原箱谷の化石採集場

各自、これぞという岩を見つけてはハンマーで砕いて化石の有無を確かめました。でもいったいどれが化石なのか、慣れていないと見当もつきません。「なんか化石っぽいなあ」と思うものを見つけては、講師の先生に次々と聞いていました。ナノナビスやエリフィラという二枚貝の化石が多く見つかる中、ゴードリセラスやパキディスカスというアンモナイトの化石も見つかり、だんだんと採集に夢中になっていました。泥岩層なので、全体的に軟らかい岩なのですが、球状の塊で硬くなったものはノジュールと呼ばれ、中に化石が入っている可能性が高くなります。今回の採集物で皆の注目を集めたのは、小学4年生の生田隆さんが見つけた綺麗なサメの歯化石で、これもノジュールを割った中から見つかったものでした。

化石採集を行っていた地層は、恐竜の生息していた中生代白亜紀後期(約6800万年前)のもので、太古の昔にタイムスリップして生きものを探している不思議な感覚と、出会えた化石に奥深い愛しみをおぼえるようでした。以下に本日採集した化石を紹介します。



ノジュールの中から現れたサメの歯化石

[二枚貝]

ナノナビス

ここで一番多く見つかる貝化石。白亜紀末期に絶滅。

エリフィラ

外形はシジミと良く似るが、分類上は関係はなし。

ヌクラ

卵形をした 10mm 程度の小型の貝。

アシラ

殻表に山形模様が刻まれている。

イノセラムス

種類も多く、広い地域で多数産出されている。

[アンモナイト]

ゴードリセラス

きれいな化石が自然遊学館で見られます！

パキディスカス

世界各地の白亜紀の地層で見つかる。

[その他]

微小巻貝、サンドパイプ、植物片

(山田 浩二)

## たわわの小池さらえ

場所：馬場 農業庭園「たわわ」

日時：2006年11月23日(木) 10:00～15:00

参加者 43名

前日の天気予報では、行中止もやむを得ないような状況だったので、予定していた前日の水抜きは中止しました。

午前8時、自然遊学館わくわくクラブの北川敏喜さんと白木茂さんが、水中ポンプで水抜きを開始、9時半にはスタッフも揃い「たわわ」農事組合副組合長の畠さんが、不足していた波板4枚と足場板4枚を持って駆けつけてくださいました。前日に事務局の方が水抜きをしてくださっていたこともあって意外に早く水は抜け、参加者集合の10時には池底が見えるようになっていました。

川崎喜三郎「たわわ」農事組合長・畠副組合長・南川事務局長及び川村自然遊学館長の挨拶とスタッフ紹介がすむと、さっそく作業を開始です。

草刈り班(大川内幸三・岡田恵司・岡田尚子・小川信夫・秋武斉子・奥田大介)、波板を流れてくる泥の流れ方向整理班(福神邦夫・川村)、波板上を流れてゆく生きもの採集班(喜多理恵・江本玲子・佐野川谷栄子・子どもたち)、胴長を穿いて泥上げ班(岡田真太郎・鈴子勝也・佐野川谷卓治ほか中学生2名)泥バケツリレー班(鈴子晴久・秋武仁志・もみ秀幸・喜多俊夫)に分かれ、スタッフ顔負けの活躍です。

バケツリレーで泥を堤の上に引き上げ、すぐ下の近木川支流へと導く波板は、バーベキュー広場からお借りしたものです。こ

の波板流し込み方式は、昨年午後からの作業で考え出され、この方法により泥上げの効率はずいぶんよくなりました。自然遊学館わくわくクラブメンバーだけではなく、一般参加の若いお父さん（秋武さん・もみさん）と少し遅れて参加した中学生3人（佐野川谷卓治さんとその友だち2人）も加わり、意気が上がりました。

泥の流れ方向整理班は、バケツから放り出されて波板の上を火砕流のように流れてくる泥を、決めた方向に導きます。生きもの採集班は流れてくる泥の中から、目ざとく魚やドジョウやスジエビやザリガニを救い出し、洗って泥を落とし容器に入れます。

草刈り班は、小池と道をはさんだ向かい側の藪を受け持ちましたが、鎌では追いつかず草刈り機もお借りし、守備範囲をどんどんこえて、辺り一面見スッキリした光景になりました。ナタで伐採をしていた小川さんに、奥田大介君が弟子入りし「僕はこれから農業をする」と、頼もしい決意を聞くことができました。

午前中の作業を11時半に終え昼食。じっとしていると濡れた身体に寒さがこたえるので、まずは泥上げ班から一人二人と作業を自主再開、ついには全員が休憩時間を放り出して持ち場についてしまいました。山口進自然遊学館わくわくクラブ会長も来られ、挨拶もそこそこスコップを手にし、泥上げ場のすぐ近くを独自に掘り進める北川さんと一緒に最強コンビ結成です。掘り上げられた泥土は、鈴子晴久さん、もみさん、奥田稔さんたちが一輪車でクリの幼樹の根元にぶちまけます。

掘れども運べども水と泥は尽きませんが、

午後1時過ぎ頃「なんか手応えが！」泥上げ班の先頭部で大きな声がしました。けれど、この池の「樋」に詳しい畠さんは、本業の農作業に戻られていて居られません。樋の仕組みの一部と思える材が出てきたりしてドキドキです。

1時半頃やっと畠さん登場、泥の中に入って手探り探索開始後まもなく、床柱のようなどっしりした「底樋の馬」「馬の頭」が現れ、「オオッ」と、どよめきがあがりました。川の水をかけ、泥の中から姿を見せた「馬」は、たった今造ったばかりのような艶やかな色合いでした。



姿を現した「馬の頭」

2時過ぎ、「馬」が現れた箇所に4本の杭を打って目印にし、作業を終了しました。

文字通り泥々の服や道具を川で洗い、3時前再集合し、採集した生きものの解説を行い、南川事務局長・川村館長の挨拶で行事を終了しました。

たわわ農事組合からお借りした足場板や波板はとても役立ち、畠さんのお力添えて、50年以上前に造られた「樋」を見せてもらえました。大阪府農と緑の総合事務所の福神邦夫さんは、河川協会所有の胴長手配や休日にもかかわらず泥だらけのボランティア

アをしてくださいました。いつものことながら、自然遊学館わくわくクラブの皆さんには、腕力から気配りまでたくさん助けていただきました。この場をお借りして、お世話になった方々にお礼申し上げます。

自然遊学館スタッフ：川村甚吉・白木江都子・山田浩二・湯浅幸子・山田量崇・向井康夫・西澤真樹子・宮本久美子

(白木 江都子)

## 源流探検

場所：近木川源流

日時：2006年12月2日(土) 10:30～15:00

参加者 22名

10時30分、蕎原のバス停に集合し出発。この土曜日から寒くなる、との予報でしたが、朝いいお天気ですまらずの登山日和。歩いていると暑いくらいでした。春日橋で一度休憩をとり、さらに本谷林道を進みました。途中フユイチゴの実があり、子どもたちは大喜びで食べながら歩く。水のしみ出した山肌にはところどころ、イワタバコの葉がたれさがり、クサアジサイの花の跡も見えました。12時ちょうどに昼食場所に着きました。

昼食後は源流をめざしミヤケ谷を進みました。(去年はトチクラ谷を登りましたが、1月末ということもあり、滝までも凍っていました。子どもたちは大喜びでしたが、滑って少し怖かった。)前半に比べかなり急勾配の道は、濡れた落ち葉がたくさん積もっていて滑りそうになります。道には、モ

ミジガサ、コアカソ、ミカエリソウなどが沢山ありました。(ミカエリソウの和名は見返り草で、美しい花なので人が見返る、という意味なのですが、実際は地味な花で葉もほとんどが虫食いの状態で、きれいな印象はありません。やや稀な種です。)木の橋を渡ると倒木が放置され、横の谷筋には水の流れる音がしました。いよいよ源流に近づいた感じでした。ヤマアジサイの花のあとや、サンショが2,3株あって、葉をもむと独特の香りがしました。さらに険しく急な坂を登ると、崖の窪みから水が流れ出している地点に到着。今年度の源流地点として、皆でサインをした杭をたてました。



近木川(ミヤケ谷)の源流地点

ちょうどそのころから雲行きがあやしくなり、雨がパラついてきたので、すぐ引き返しました。昼食場所に着いた頃にはすっかり雨になっていました。ショボショボ雨の中急いで山を下りましたが、蕎原のバス停に着いた途端横殴りのすごい雨になりビシャビシャになりました。が、なんとか無事に行事を終えることができました。

(湯浅 幸子)

## 「トンボの池」の池さらえ 2006 冬

場所：二色市民の森自然生態園

日時：2006年12月17日（日）11:30～15:30

参加者 16名

12月9日に予定していた一般参加の池さらえ行事は、あいにくの雨で中止になってしまいました。毎冬の池さらえ時の生きもリストが欠けるといけないので、1週間後に、有志でトンボの池の生きもの調べを行いました（図1）。以下にそのリストを示します。



図1. 採集物を分けているところです

### 自然生態園の「トンボの池」の生きもの調べ

2006年12月17日、「トンボの池」の池さらえ時のリスト  
数値は個体数を示しています。

午前、15分×2名で採集、定量採集

午後、なるべく多く採集、任意採集

種	ステージ	午前のみ	午前+午後
ギンヤンマ	幼虫	9	13
シオカラトンボ	幼虫	0	2
ショウジョウトンボ	幼虫	2	5
ハイロゲンゴロウ	成虫	4	17
チビゲンゴロウ	成虫	1	2
フタバカゲロウ属	幼虫	1	3
コマツモムシ	成虫	>100	>100
アメリカザリガニ	-	122	697
イトミミズ類	-	0	8

わくわくクラブ（鈴木、高野、江本、坪井、森本）  
寺田、山下

午前中は2名が15分採集する定量調査を行い、午後からは出来るだけ多く採集する任意調査を行いました。ヤゴは、ギンヤンマ、ショウジョウトンボ、シオカラトンボの3種で、昨年と同じメンバーでした。2005年と今年の3種という結果は、2001年から2004年にかけての6種程度から比べると半減しています。

昨年までは冬の一ヶ月程度の間、池の水を抜いて池干しを行い、ヤゴを別の水槽に避難させていました。ところが年を経るごとに、池にヤゴを戻す時まで弱ってしまうことが多くなったので、今年からは池干しをやめることにしました。採集したヤゴは数えた後に、すぐに水の中に戻しました。

どうしてトンボの池にヤゴが少なくなってしまったのでしょうか。池がきれいになりすぎているのかもしれませんが。冬が暖かくなってザリガニがヤゴを食べる数が多くなったのかもしれませんが。あるいは、市民の森周辺の環境が悪くなって、トンボの親が来にくくなったのかもしれませんが。調査の後で、いろいろ議論しました。ヤゴがもっとたくさんいるトンボの池にするため、これから工夫しないといけないことがたくさんありそうです。

（自然遊学館わくわくクラブ）

## ■生きものよみもの

### カマキリタマゴカツオブシムシ の生活史 1

8月15日(2006年)に貝塚市千石荘で採集したオオカマキリのふ化後卵囊<sup>らんのおう</sup>(春に幼虫が孵<sup>かえ</sup>った後の卵囊)から10月上旬に体長3~4mmのカツオブシムシの成虫が5個体出てきました(10月3日1♂、-6日1♂1♀、-8日1♀、-12日1♀)。これは、カマキリタマゴカツオブシムシ *Thaumaglossa rufocapillata* Redtenbacher で、前号で紹介したカマキリの卵に寄生<sup>きせい</sup>するオナガアシブトコバチと同じく、カマキリにとっては「天敵<sup>てんてき</sup>」と言えます。

カツオブシムシ科は日本では約40種が知られ、その幼虫は一般的に乾燥した動物質を摂食します。その中には、衣類、鯉節、穀物、昆虫標本などの害虫として有名なヒメマルカツオブシムシのように野外と室内の両方に生息するもの、小麦や麦芽など貯蔵食品の害虫として有名なヒメアカカツオブシムシのように室内のみに生息するもの、および、カマキリタマゴカツオブシムシのように野外のみに生息するものがあります(中元、1987、1988)。室内害虫でもあるヒメマルカツオブシムシの幼虫は、大林・酒井(1998)によると、「野外では鳥の巢内の羽毛や古いハチの巢内の昆虫の死がいなどを食べている」そうです。

先に述べた千石荘での採集例は秋ですが、皆さんの中には、秋から冬の間にカマキリ類の卵囊を採集して春にカマキリの幼虫がふ化するのを心待ちにしていると、代わり

にこのカツオブシムシが出てきたという経験があるかもしれません。この春に出てくる成虫は越冬世代です(図1)。このように本種の成虫がみられる時期は春と秋の年2回です。越冬世代は、幼虫がカマキリ類の越冬卵囊の中で卵を摂食しつつ発育し春に羽化することが知られていましたが、秋に羽化する世代の幼虫がどうやって夏を過ごしているのかは、長い間不明なままでした(石井、1937)。



図1. カマキリタマゴカツオブシムシ♂成虫

今回から5回に分けて、このカツオブシムシの生活史、特に夏の生活史が明らかになっていく過程、およびそれに付随して分かったこと、新たに出てきた疑問などを紹介したいと思います

まず、越冬世代によって摂食を受ける卵囊の割合(卵囊寄生率)がどの程度かということですが、大阪府南部と和歌山県北部で行った調査では、オオカマキリ、チョウセンカマキリともほぼ1割程度でした(表1)。詳しいデータは省きますが、これまでに報告されてきた割合は3~5割程度で、今回の結果はそれらより低い値でした(表2)。卵囊寄生率の違いの原因は分かりません。

表1. カマキリの越冬卵囊からカマキリタマゴカツオブシムシ成虫が脱出した割合

N : 採集卵囊数  
A : カツオブシムシ成虫が脱出した卵囊数  
B : カツオブシムシ成虫のみが脱出した卵囊数

オオカマキリ卵囊						
調査地名	市	調査年	N	A	B	A/N
光明池	堺・和泉	1991年	77	9	4	0.117
野々井	堺	1991年	35	1		0.029
堺・和泉	—	1993年	30	2	2	0.067
堺・和泉	—	1994年	30	3	3	0.100
千石荘	貝塚	1996年	29	3	2	0.103
豊田	堺	1996年	23	2		0.087
緑ヶ丘	和泉	1996年	30	4	2	0.133
和田	堺	1996年	30	3		0.100
谷	和歌山	1996年	44	4	2	0.091
大阪府大	堺	1997年	26	7	7	0.269
堺・和泉	—	1997年	30	4	3	0.133
堺・和泉	—	1999年	30	4	3	0.133
千石荘	貝塚	2002年	31	4	1	0.129
合計			445	50	29	0.112

チョウセンカマキリ卵囊						
調査地名	市	調査年	N	A	B	A/N
野々井	堺	1991年	38	5	4	0.132
堺・和泉	—	1993年	30	2	2	0.067
堺・和泉	—	1994年	30	4	3	0.133
豊田	堺	1996年	23	1	1	0.043
和田	堺	1996年	30	1	1	0.033
大阪府大	堺	1997年	21	2		0.095
堺・和泉	—	1997年	30	3	3	0.100
堺・和泉	—	1999年	30	2	2	0.067
浦田	和泉	2002年	28	2	1	0.071
合計			260	22	17	0.085

表2. カマキリタマゴカツオブシムシによる卵囊寄生率

N : 採集卵囊数  
A : カツオブシムシ成虫が脱出した卵囊数

文献	カマキリの種	N	A	A/N
石井 (1937)	オオカマキリ	77	38	0.493
桐谷 (1959)	オオカマキリ	13	4	0.308
大山 (1987)	オオカマキリ	60	22	0.367
熊代 (1938)	チョウセンカマキリ	37	10	0.270
松良 (1979)	チョウセンカマキリ	34	13	0.382

摂食を受けた卵囊からは、全くカマキリ幼虫がふ化しないこともあれば(表1のB: 食いつくし)、一部の摂食を免れたカマキリ幼虫がふ化することもありました(表1のA

とBを参照)。そして、カツオブシムシ成虫のみが脱出した卵囊に限って個体数を比較すると、オオカマキリ卵囊から14~81個体、平均37.7個体、標準偏差15.8(卵囊数=29)、チョウセンカマキリ卵囊から21~36個体、平均28.6個体、標準偏差5.2(卵囊数=17)という結果になりました(表3)。オオカマキリ卵囊からの方が脱出個体数のばらつきが大きく(F検定により $P < 0.01$ )、脱出個体数も多い(t検定により $P < 0.01$ )、という結果が得られました。(つづく)

表3. カマキリ卵囊から脱出したカマキリタマゴカツオブシムシ成虫の雌雄別個体数

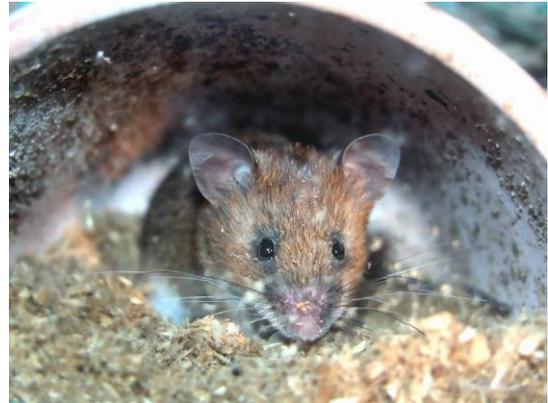
カツオブシムシ成虫のみが脱出した卵囊				
オオカマキリ卵囊 (N=29)				
調査地	調査年	♂	♀	合計
光明池	1991年	16	18	34
		13	18	31
		34	24	58
堺・和泉	1993年	13	15	28
		17	19	36
		5	11	16
堺・和泉	1994年	18	18	36
		16	18	34
		6	8	14
千石荘	1996年	23	24	47
		30	20	50
緑ヶ丘	1996年	17	22	39
		21	14	35
谷	1996年	34	36	70
		29	29	58
大阪府大	1997年	9	10	19
		12	9	21
		22	14	36
		18	22	40
		20	16	36
		44	37	81
		15	16	31
堺・和泉	1997年	9	10	19
		17	17	34
		10	13	23
堺・和泉	1999年	21	33	54
		25	25	50
		13	18	31
千石荘	2002年	18	14	32
合計		545	548	1093

## 【泉州生きもの歳時記】

### 山の野ネズミ・ヒメネズミ

チョウセンカマキリ卵囊 (N=17)

調査地	調査年	♂	♀	合計
野々井	1991年	17	13	30
		16	20	36
		21	14	35
		7	14	21
塚・和泉	1993年	15	13	28
		11	13	24
塚・和泉	1994年	13	14	27
		15	19	34
		12	11	23
豊田	1996年	20	13	33
和田	1996年	13	15	28
塚・和泉	1997年	21	13	34
		17	7	24
		13	11	24
塚・和泉	1999年	9	13	22
		18	10	28
浦田	2002年	13	23	36
合計		251	236	487



貝塚市の秋山林道沿いで見つかりました

#### 参考文献

- 石井五郎 (1937) 蚕糸試験場報告 9 : 151-165.  
 岩崎 拓 (2000) 昆虫 (ニューシリーズ) 3 : 65-70.  
 岩崎 拓ほか (1994) 応動昆 38 : 147-151.  
 大林延夫・酒井雅博 (1998) 「日本動物大百科 10・昆虫Ⅲ、(平凡社)」 : pp. 126-127.  
 大山義雄 (1987) 三重生物 37 : 25-31.  
 熊代三郎 (1938) 応用動物学雑誌 10 : 254-256.  
 桐谷圭治 (1957) 生態昆虫 7 : 111-116.  
 松良俊明 (1979) 京都教育大学紀要 B 55 : 49-58.  
 中元直吉 (1987) 昆虫と自然 22 : 15-19.  
 中元直吉 (1988) 昆虫と自然 23 : 9-12.

ここで紹介する結果は主に、大阪府立大学農学部昆虫学研究室 (岩崎拓・青柳正人・山本将博・百々康行・石井実) において行われた研究 によります。

(岩崎 拓・青柳 正人)

自然遊学館では年 2 回の小哺乳類捕獲調査をしています。餌を入れた箱形の生け捕りワナを使って、どんなネズミが入るか調べるのです。時にはモグラやイタチが入ることもあります。

今までは日本の代表的な野ネズミであるアカネズミが捕獲されていましたが、今年の 6 月 26 日、秋山林道の沢沿いの、針葉樹が混じった林にかけたワナにヒメネズミのメスが入りました。計測すると体重 14.7g、頭胴長 88mm、尾長 91mm、後足長 18.3mm、耳長 10.1mm でした。

ヒメネズミはアカネズミと比べて、尾が体長よりも長いのが特徴です。ややとがった雰囲気の顔、濃いグレーの縁取りのある目 (アカネズミほど大きくない)。背中の色はくすんだ茶色、腹は白です。小さくてかわいらしいことから名付けられ、英語の呼び名では芸者鼠 “Geisha mouse” とも言われていました。樹上をよく利用し、小鳥

の巣箱をかけているとこのネズミが入って子育てをすることがあります(今泉, 1984 ほか)。木登りがとても上手で、細い針金の先にえさ入れを付けてまっすぐに立て、どこまで登れるか実験したところ、アカネズミが途中で落ちてしまうのに対しヒメネズミはすいすいと登っていくことができます(今泉, 1996)。

ヒメネズミは亜高山帯に生息するといわれます。生きる力が強く、森林から草地までさまざまな環境に暮らせるアカネズミとちがい、大阪ではヒメネズミが暮らせる環境はそれほど多いとはいえません。これは和泉葛城山という山を持つ貝塚市ならではの生きものともいえます。このネズミがいつまでも山にいられるよう、みんなで守っていきましょう。

※1995年10月に豊能町剣尾山東麓で行われた調査で、ヒメネズミがセキセイインコ用巣箱の中で繁殖していたという記録があります。

(西澤 真樹子)

## ■館長コーナー

### 冬2. 冬の海岸から

「何べん聞いたらわかるんやろ」その後、「あほちゃうか」がつくかもしれません。この過激で、非人間的な言葉ですが、なぜかそのときの様子をうまく伝えることができます。上に書き出したのは、実際に言ったり、言われたりした言葉ではありません。私が勝手にある場面を想像して思い込んだだけなのです。



スサビノリ(二色浜海浜緑地 2003年3月12日)

「アサクサノリ」というおいしい海苔があります。昔から、巻き寿司や佃煮にされてきた海苔です。東京湾で採れたのを浅草で加工されてきたのでしょうか、それともその辺りは汽水域でおいしいものがたくさん採れたのでしょうか。それで、「アサクサノリ」という漢字名がついたのでしょうか。しかし、現在天然ものはほとんど見られない(『日本の海藻』平凡社 以下『同書』)といわれています。それで「オオバアサクサノリ」が養殖されているようです。

しかし、私たちが生活しています大阪湾などではオオバアサクサノリではなく「スサビノリ」を養殖しているようです。この海苔の名前がいつもわからなくて本館の研究員 Y さんに尋ねるのです。10 回近くも教えてもらっているのに覚えられないのです。だから「何べん聞いたらわかるんやろ」なのです。いっそ思い切って、「アホチャウカノリ」と命名したら一発で覚えられるに、なぜこんな難しい名をつけたのでしょうか。「葉状体の先端部分がくさび状の縞模様になることが一大特徴である」(『同書』)とありますから、そういう説明がつかますと

若干わかりやすくなってきます。

この海苔の胞子が私の住む岬町(だけでなく泉南地区)の海岸でもそれが流れ着いて冬になりますと、石やテトラポットなどに付着し、生育します。これを波しぶきを受けながら摘み取ってきて醤油のみで煮付けて、佃煮風に仕上げます。言葉にならないほどの絶品です。ごくまれにスーパーマーケットなどでその生海苔が販売されていますが、養殖ものはごつごつしておいしくありません。元の種は同じかも知れませんが、天然の仲間入りをしたこの海苔は柔らかく、風味豊かなのです。

寒中に海に行くだけでも大変寒いのに、手でその短い海苔をむしりとるのです。1時間採っても小さなざるに半分くらいしか溜まりません。それだけではありません。わが口に入るまでは海苔を洗うという作業をしなくてはなりません。採るのに1時間要したとしたら、洗うのに2時間はかかるのです。水道の蛇口を調節して流水で付着した砂などを取り除くのです。

この海苔がわが町(泉南地区の他)の海岸に大量に付着し始めて30年ほど経過しました。私が10歳くらいのときも茶褐色のこの海苔がありました。一見同じに見えるこの海苔は、正確には違うものかも知れません。なぜならその当時は海苔の養殖はなされておりました。養殖が始まったのは30年くらい前からだと記憶しております。だからそれ以前と以後のものは同じであるのか、違うのか、教えてほしい第一です。

第二の疑問もあるのです。欲張りな私はこの歳になっても知りたいことが一杯あって、幼子のように、「これなあーに」を連発

しています。ただ、処世術は若干ありますので、実際には音に出さないで、心の中で叫んでいます。だから、人にはあまり被害をかけていませんので、その点をご理解ください。

さて、その問題とは、30年前が軸になるのです。養殖が始まる以前は地元では「アオノリ」と言っていた海苔が現在のスサビノリの生育域にあったのです。これは料理にもよるのですが、準天然のスサビノリより数段美味であったのです。この極美味の「アオノリ」が15年ほど前に全く姿を消してしまいました。

推測すると、その「アオノリ」とは、スジアオノリの可能性が高いのです。私の記憶はかなり薄くなっていますが、B4くらいの広がりがあれば多分見分けることができます。(ヒトエグサ、ヒラアオノリ、ウスバアオノリの可能性もありますが)素人考えですが、その海苔を「アオノリ」ということにします。「アオノリ」は気が弱く、養殖用の強いスサビノリの胞子に負けてしまったのでしょうか。それで、「アオノリ」が絶滅したと思うのです。(実際には海水温とか他の条件でなくなったのかわかりませんが・・・)

それにしても、実際に海苔採りは上手にできても、自分の手で摘み取っている種類の判断ができないとはやはり、「あほちゃうか」ですね。

(川村 甚吉)

## ■投稿

### みどりいろのコカマキリが7個のたまごをうみました！

ぼくは、ゆう学かんのはこたにハイキングにいきました。おべんとうのあとカマキリをつかまえました。そしてカマキリの先生いわさきさんに名まえをききました。

名まえはコカマキリでみどりいろのコカマキリはとてもめずらしいそうです。ふつうはちゃいろです。それでかうことにしました。

エサは、ササキリやオンブバッタです。エサさがしはしんどかったです。おじいちゃんやおばあちゃんやいとこやおかあさんがてつだってくれました。

コカマキリは、たまごを七かいうんでしんでしまいました。よるコカマキリがたまごを一かいうんでいるときおかあさんがおこしてくれて、みたのにあさおきたらおぼえていません。ざんねんです。

ぼくは、みどりいろのコカマキリの子どもがみどりかちゃいろかみてみたいです。たまごをはるまでだいじにおいときます。たまごから生まれてくるのがたのしみです。

(貝塚市立北小学校1年 江本 大地)

緑色コカマキリ♀の飼育データ

採集日：2006年10月14日

採集場所：貝塚市蕎原箱谷

採集者：江本大地

エサ：ササキリ類など

産卵日(産卵間隔)：1個目 10月14日

2個目	10月21日(7日)
3個目	10月28日(7日)
4個目	11月10日(13日)
5個目	11月17日(7日)
6個目	12月4日(17日)
7個目	12月19日(15日)
死亡	12月20日



コカマキリ♀緑色型(10月14日蕎原にて)

(江本 玲子)

## ■寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2006年12月分まで)

### <哺乳類>

- ◆市原さん、畑中さん、佐藤さん、木田さん、小塚さんより  
ネコ死体1点  
貝塚市二色 2006年10月2日拾得

### <鳥類>

- ◆飯田政治さんより  
タシギ死体1点  
りんくう南浜：臨海線路上  
2006年9月18日拾得
- ◆森樹雄さんより  
バン死体1点  
貝塚市西町：府道境阪南線路上  
2006年9月21日拾得
- ◆川口博久さんより  
オオルリ♀死体1点  
貝塚市：脇浜潮騒橋  
2006年10月1日拾得
- ◆中谷憲一さんより  
ムクドリ死体1点  
大阪市鶴見区緑地公園生き生き地球館前  
2006年9月22日拾得

### <爬虫類>

- ◆白木 翠さんより  
二ホンカナヘビ生体1点（前回報告漏れ）  
岸和田市葛城町 2006年8月23日採集
- ◆白木 茂さんより  
二ホンカナヘビ生体1点  
岸和田市葛城町 2006年9月1日採集

### <魚類>

- ◆岡村親一郎さんより  
ハナオコゼ生体1点  
泉佐野市フェリー乗り場付近  
2006年9月15日採集
- ◆河野通浩さんより  
ドジョウ生体1点  
岸和田市土生町：用水路  
2006年9月20日採集
- ◆芝田健人さんより  
カワムツ生体1点  
貝塚市：アスレチック付近の近木川  
2006年9月25日採集
- ◆食野俊男さんより  
モツゴ生体5点  
貝塚市島中：今池に流れ込む水路  
2006年9月採集
- ◆森樹雄さんより  
スナヤツメ生体1点  
豊岡市庄境（円山川支流）  
2006年11月5日採集  
カマツカ生体5点  
シマドジョウ生体2点  
タナゴ生体1点  
橋本市（紀ノ川）2006年11月19日採集  
カワアナゴ生体1点  
ミミズハゼ生体2点  
テングヨウジ 1点  
チチブ生体5点  
阪南市（男里川）2006年11月21日採集  
カジカ2点  
タカハヤ1点  
ズナガニゴイ1点  
モツゴ1点  
カワムツ1点

ヨシノボリ類 1点  
 豊岡市竹野町森本（竹野川）  
 2006年11月24日採集  
 ギギ 2点  
 京都府八木町：大堰川 採集日不明

<甲殻類>

- ◆鈴子佐幸さんより  
 ヒメケブカガニ 1点  
 岬町深日沖 2006年6月11日採集
- ◆芝田健人さんより  
 サワガニ生体 2点  
 貝塚市：アスレチックの下の川  
 2006年9月25日採集
- ◆森樹雄さんより  
 テナガエビ生体 20点  
 阪南市（男里川） 2006年11月21日採集

<軟体動物>

- ◆小崎祥太郎さんより  
 マツバガイ生体 1点  
 貝塚市二色運河 2006年10月25日採集
- ◆吉田侑生、大和倅さんより  
 コウダカアオガイ生体 6点  
 マツバガイ生体 2点  
 貝塚市二色運河 2006年10月26日採集

<昆虫>

- ◆松波尚哉さんより  
 オオカマキリ♀成虫 1点  
 オオカマキリ卵囊 1点  
 貝塚市二色 2006年10月9日採集  
 2006年10月16日産卵
- ◆田中正視さんより  
 クロメンガタズメ成虫 1点  
 泉佐野市上之郷 2006年10月9日採集
- ◆江本大地・玲子さんより  
 コカマキリ♀成虫（緑色型） 1点

- 貝塚市蕎原箱谷 2006年10月14日採集
- ◆松波佑志さんより  
 ヒナカマキリ♀成虫 1点  
 貝塚市蕎原箱谷 2006年10月14日採集
- ◆木室仁太さんより  
 ハラビロカマキリ♂成虫 1点  
 貝塚市蕎原箱谷 2006年10月14日採集  
 ウスバキトンボ幼虫 2点  
 貝塚市二色 2006年11月1日採集
- ◆高野晴一郎さんより  
 センチコガネ成虫 1点  
 キボシアシナガバチ巣 1点  
 貝塚市蕎原箱谷 2006年10月14日採集  
 ツマジロカメムシ成虫 1点  
 紀の川市桃山 2006年12月23日採集
- ◆奥田大介さんより  
 ウマオイ属の一種♀成虫 1点  
 貝塚市蕎原箱谷 2006年10月14日採集
- ◆江本大地・玲子さんより  
 クルマバッタモドキ成虫 2点  
 泉南市新家 2006年10月26日採集
- ◆福島征二さんより  
 トックリバチ巣 3点  
 泉佐野市上之郷 2006年10月26日採集
- ◆森樹雄さんより  
 クロゲンゴロウ成虫 1点  
 豊岡市庄境 2006年11月5日採集  
 カワトンボ幼虫 2点  
 ムカシトンボ幼虫 1点  
 コシボソヤンマ幼虫 2点  
 ヤマサナエ幼虫 4点  
 コヤマトンボ幼虫 9点  
 オオヤマカワゲラ属の一種幼虫 1点  
 マツモムシ成虫 1点  
 ナベブタムシ成虫 10点

ミズカマキリ成虫 2点  
タイコウチ成虫 1点  
ニンギョウトビケラ筒巢 1点  
ガガンボ属の一種幼虫 1点  
豊岡市森本 2006年11月24日採集  
アケビコノハ成虫 1点  
貝塚市二色 2006年11月24日採集

◆五藤武史さんより

スズバチ巢 1点  
アカハバビロオオキノコ成虫 5点  
貝塚市馬場 2006年12月1日採集

◆長谷川千春さんより

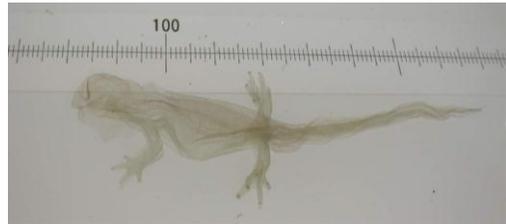
コガタスズメバチ巢 1点、成虫 2点  
大阪市阿倍野区 2006年12月22日採集

## ありがとう

自然遊学館、関空交流館、山手地区公民館で開催した「近木川の水生昆虫」展では、青柳正人、森本静子、澤田義弘（箕面昆虫館）、平田慎一郎（きしわだ自然資料館）、松浦宜弘、宮原亮平、寺田拓真、山根祥之、木室仁太、田中貴大の各氏（および各館）に展示の協力をしていただきました。また、展示標本の同定に関しては、青柳正人、藤谷俊仁、上西実、中谷憲一、松田勲、澤田義弘の各氏に協力していただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

## ■遊学館スタッフ日誌

11月15日、この秋の蕎原ハイキングに行った高野さんより、「採集したイモリを家で飼育していたところ、イモリの抜け殻を見つけた」との連絡をいただきました。持参していただいたところ、とても薄い皮ですが、ほぼ全身が揃い綺麗なものでした。（浩）



12月14日、しとしとと降り続く、連日の雨の中、玄関ロビーの水槽で人気者だったタカクラタツ（タツノオトシゴの仲間）が静かに永眠しました。この夏、淡路島の海から当館に送られて来てからというもの、尾っぽをエダに絡ませじっとしているポーズや、餌のヨコエビやアルテミアをおちよぼ口で吸い取る様子が来館者の注目を集めていただけに残念です。（浩）



12月15日、イラストと表紙デザインを担当した『生き物屋図鑑』（盛口満著、木魂社）が出版されました。「生きものの専門家（＝生き物屋）は面白い！」をコンセプトに、

さまざまな生き物屋の行動を紹介しています。自然遊学館に出入りする「あの人」も

もちろん登場します。書店や図書館で見かけたら、ぜひお手にとってご覧下さい。新年も動物の骨格に関する写真絵本を出版予定です。本づくりは全く儲かりませんが、楽しい作業です。(西)

12月31日、世間はいよいよ新年へのカウントダウンを始めた頃、ふと今年の出来事に思いを巡らせてしまいました。なかでも印象深いのが、7月にオランダで行われた国際カメムシ学会に参加したことです。世界の著名な研究者に囲まれて過ごしたひとときは、今では大切な宝物です。(量)

## ■おしらせ

### 遊学館のホームページをご覧ください

自然遊学館のホームページには、行事のお知らせや報告に加え、貝塚の生きものや自然の最新情報が満載です。ふだんはモノクロ印刷の「自然遊学館だより」をカラーでお楽しみいただくことができ、バックナンバーも読めます。閲覧には検索サイトに「自然遊学館」と入力するか、上記QRコードからどうぞ。(西)



## 18年度 近木川市民フォーラム開催

「川から海へ 持続可能な環境学習・子どもの参画」…地域のささえ、シニアのささえ…

「近木川で環境学習を継続するためには」をテーマにフォーラムを開催します。

日時：2007年2月10日(土) 13時～17時

場所：浜手地区公民館

主催：近木川流域自然大学研究会、貝塚市立自然遊学館

## 3月25日(日)は自然遊学館の友だち集まれ！！

自然遊学館の行事に参加して学習したことや、貝塚の自然について自分なりに興味深いなあと思うことを発表してみませんか。身近なテーマ大歓迎、気軽な参加をお待ちしています。

日時：2007年3月25日(日) 13時～15時

場所：自然遊学館多目的室

自然遊学館だより 2007 冬号 (No. 42)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/index.htm>

発行日 2007.1.12

この小冊子は庁内印刷で作成しています。